

素直な 気持ちを 伝える



「赤ちゃん登校日」の授業風景
鳥取県東郷町の王道小学校

人間関係が希薄な現代、「ミニミニケージ」が著手な子どもが増え、さまざまな人間関係の問題が起きている。時代を担っている大人はどうか。大人も職場、地域、家庭でのコミュニケーションに苦戦している。子どもや若者の問題は、親の問題ともつながっている。

事前学習と関わり体験

今日の子どもたちにとって、自身自身やそばにいる人を大切に思う気持ちを育む教育が不可欠である。鳥取大学の「赤ちゃん登校日」授業は、その解決策を探るヒントになる。

鳥取発 「赤ちゃん登校日」授業

成長に必要な

つながり学ぶ

この授業で児童は、学校にやってくる赤ちゃん（月齢3〜7カ月前後）連れの親子と向き合う。全4回の学習プログラムは、「ミニミニケージ」の基礎を学ぶ「事前学習」と、3回にわたる赤ちゃん親子との関わり体験からなる。「事前学習」では講習を通して、他者にあたたかい関心をもち、相手に近づ

き「みること・きくこと・伝えること」を学ぶ。

「関わり体験」は、児童と親子が1対1でペアを組み、1カ月に1度のペースで継続的に交流する。児童にとって交流は、事前学習で気づいたことを実践する場となる。事前学習を重視すること、1対1の継続的交流を行うことが、この授業の特徴である。

愛されてきたこと実感

学校現場から児童の伝える力が弱いという話を耳にする。その一因は、自分の気持ちや考えを、安心して他者に伝えられる人間関係が育まれていないからではないだろうか。赤ちゃんとの交流では、否定や批判の言葉が子どもたちに届けられることはない。よって、子どもたちは安心して、自分の考えや気持ちを伝えることができる。

素直な気持ちが言葉になつていく。赤ちゃんを中心にして、赤ちゃん



んの親と児童が、お互いに関心をもち、話したり聴いたりする。自分の話を真剣に聴いてもらえると、相手に受けとめられ、認められたという自己肯定感が芽生え、お互いの心が満たされていく。

交流期間中に赤ちゃんは、目に見える成長を認める。一人では何もできない赤ちゃんの成長を目の当たりにした児童は、自分がどれほど親をはじめ他者に愛されてきたのか実感する。赤ちゃんは誰かの関わりがないと、いのちをふくらます喜びがない。理屈ではわかっていても、実際にそんな存在を実感することの意味は大きい。

ふだんの関わりを再考

児童の目からは親もあかぬ。愛されている自分を実感することは、生きていく元氣と勇気を与え、自分を大切にすることもつながる。認めあえる幸せを実感した生徒は、その心地よさを日常のクラスの中で生かす。一人一人を、大切な仲間と感じ、真剣に向きあい、自分の考えや気持ちを誠心誠意伝えようようになる。まさに、安心して学びあえる学習環境を構築していく後押しになる。

また、この授業に向き合う教職員、保護者、パパママ、地域の人一人一人が自分の生き方やふだんのコミュニケーションのありさまを再考する機会にもなる。人は人との関わりの中で成長する。人がいのちを輝かせて生かすには、人と関わりつながる必要がある。

赤ちゃんとの関わりは、日々の暮らしの中で私たちが忘れがちな、とても大切なことに気づかせてくれる。

鳥取大学医学部准教授 高塚人志